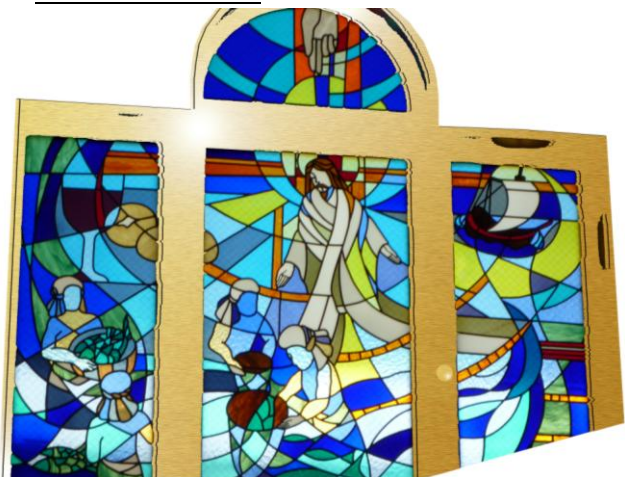


あま かお お あな
甘い香りの落とし穴

① 「熊」の物語



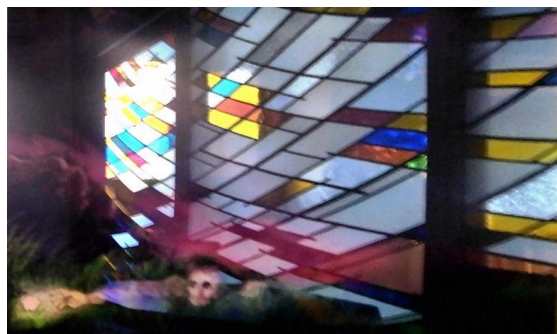
18 世紀のこと。ぜいたくな暮らしをして
いた貴族がいて、華やかなレセプションを
開くことで有名でした。

彼は熊を飼っていて、ある日宴会に集まっ
ていた人々にスリルを与えようとお客さ
んたちがいい機嫌になった頃を見計らっ
て熊を引っ張り出しました。部屋の隅には
はちみつの入った鍋が用意されていまし
た。はちみつが大好きな熊はお客さんには
目もくれず臭いのするほうへ走って行き
ました。ところが貴族は意地悪くもその
はちみつを熱く煮ていました。熊は最初た
めらったのですがつい我慢できずなめ始
めました。恐ろしいという声を立てながら
それでもはちみつをたいらげるまでやめ
ませんでした。口の中のやけどが治るまで
断食する苦しい 1 週間を送ることになり
ました。

* 皮肉な悲観主義の貴族は人生をけなす
つもりで「人間だってこの愚かな熊と変わ
りはしない。自分の害になること、それを
はっきりと意識しながらもやらずにおれ
ない。自分で自分の首をしめるのさ」と
冷笑しながら言ったそうです。

—この物語は作り話なのか本当の話なの
かがわかりませんが、いずれにしてもこの
物語の熊から、キリスト者として学ぶこ
とがあるような気がします。

* 私たちが真の幸せへ導く道を歩むこ
とができるためにいつくしみ深い神はイ
エスを通して確実な道、安全な道を案内し
てくださいました。ところが「大好物」
に見えるものを得るために、場合によって
私たちは全く違った方向へ走ってしまし
ます。自分の不幸を自分の手で作り、自分
の苦しみを、自分で増してしまいます。し
かし、それを認めたくないため自分に甘え
て自己を弁解し、他人のせいにするくせに
身を任せてしまいます。—その悪循環か
ら脱出するためにイエスが案内された道
に戻るよう努力することは賢い選択で
はないでしょうか。—「熊さんよ、この話
の落ちをどう思う」。



② ミサ？面白くない。



「ミサは面白くない」「日曜日に教会に行くのはいやです。」それは多くの人が聞き、あるいは口にした言葉でしょう。—小学生にとって野球やサッカーをした方が楽しい。中学生女子にとっておしゃべりをしながら友だちとデパートに行った方が楽しい。若い男性にとって彼女とドライブをしたほうが楽しい。それは決まっている。一般的に言われる「面白い」「楽しい」という観点から考えれば確かに感謝の祭儀はこれらの楽しみと競うことができません。—だから「感謝の祭儀に参加しましょう」と呼びかける時に、感謝の祭儀の大切さを理解していただくことには苦しみます。それはその人の信仰と深い関係があるからです。特に、現代社会の影響をものに受けている若い親と子どもたちにその大切さを認識していただくことが簡単なことではありません。

*長い間、教会は日曜日の「ミサ」が「義務」として強調し、それにこだわりすぎたためか、感謝の祭儀のすばらしさは十分に経験されなかったためか、「面白くない」という暗いイメージが生じて来たのかも知れません。

*反面、近年理屈を付けて「ミサに行かなければ信仰がないと決めつけてはいかん。」と主張する人が出てきました。

それはその通りですが、それを言い訳と自己弁解のために利用すれば困ると思います。「ミサに行かない」そのこと自体は信仰が生きているしるしにもなりません。



◎感謝の祭儀に参加するかしないかに当たって、キリスト者である自分にとって、「感謝の祭儀」とは何か、ということについて真剣に考えることは避けて通ることのできない問いかけだと思います。

—義務だから参加する。面白くないから参加しない。判断の基準をその単純な発想に置けば、イエス・キリストへの生きた信仰が自分のうちに養われるはずがありません。—キリスト者として、社会の中で生き、キリスト者として社会の中でイエスを証しするために感謝の祭儀に参加することは、欠かすことのできないことであると新たに認識することは、大切なことではないでしょうか。

